AERA STYLE & VIEWS FOR MEN
AUTUMN / WINTER
VOL.61 2026

STYLE MAGAZINE

アエラ増刊 No.61 11月15日号 昭和63年6月10日第3種郵便物認可 2026年11月15日発行（増刊）11月6日（金）発売 通巻2178号



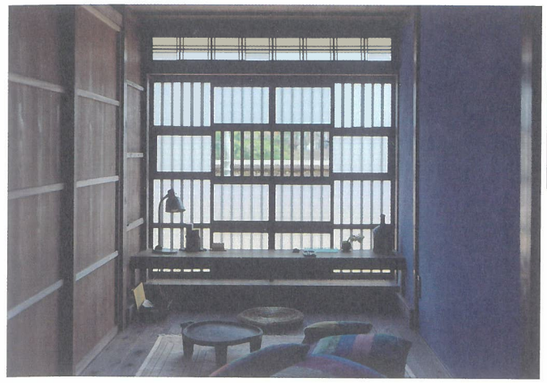
センスがいい人の旅。

TRAVEL IN STYLE

笠松 将、名建築に思いを馳せて。
上白石萌歌が誘う、歴史を呼吸する旅。
岸谷五朗を魅了する、秘境の美酒佳肴。

中村隼人、歌舞く腕時計と。
温故知新、現代のドレスアップ。
大野拓朗と考える、コートの正解。
マッチと町中華。…etc.

表紙の人 町田啓太





昭和の文士の気分を味わえそうな小さな文机も、あつらえている（左）。ちゃんとした料理も作れるほど充実したキッチンも（右）。

ラマのよう。

この地に暮らす人たちの息遣いが聞こえるような雰囲気抜群の町で、非日常のぜいたくが融合した宿に泊まる。暮らすように……というのは、もはや旅の常套句のようになっています。しかしここは、プロによる微細な仕掛けを堪能しながら、暮らすように、かつ〝アガリながら〟旅する拠点に仕上がっているのです。

KNOWLEDGE No.3

ミュージシャンも参画 能登ヒバ材から生まれた 国産エレキギターの挑戦

Photograph:©Furutani Lumber

Foochi Koochi / Atenote / Ishikawa

「これね、能登のヒバ材でつくったギターなんです」

シアタールックの佐藤タイジさんはあるライブのMCで、まずギターの話をさせてほしいと切り出しました。タイジさんは「カッティングにとても向いていて（カッティングを）多用する曲にはぴったり」だと言い、マイケル・ジャクソンの『今夜はドント・ストップ』のイントロを弾きはじめたのです。

このギターは、石川県金沢の木材問屋がスタートさせたATENOTE（アテノオト）によるプロジェクト。明治から続くフルタニランバーの五代目・古谷隆明さんは、林業復興を文化的観点から行いたいと、2020年に能登材で楽器をつくるATENOTEを立ち上げました。

「木材は、用途の中心が建築や内装などの部材です。そしてその建材は〝あって当たり前〟のように扱われています。しかし自分は、（木材には）もっと新しい使い道があるし、求められているはずだ、とずっと思っていました」

木が成長し資材となるまでには、何十年、長いときには何百年の歳月を要します。そして、森林所有者や林業に携わる人たちが枝打ちといった世話をしながら育てていくのです。古谷さんは、そうやって出来上がる木材は決して「当たり前にある」ものではなく、感謝し敬意を払うものであるべきだ、と常々考えていました。

「そんな思いをどう伝えていこうかと思案するなかで、木の流通会社から木の価値を届ける企業へと社のコンセプトも変えました。また自分が音楽好きということもあって、楽器づくりを事業のひとつとして活動を始めたんです」

自身もバンドマンであり、音楽関連企業で働いていた過去もある古谷さん。そんなバックグラウンドから、家業を継いだのと同時期にATENOTEをスタートさせました。事業は「（ミュージシャンが）アルバムや新曲をリリースするような感覚を大事にしている」のだと話します。どのようにして、どのような形で、どういった思いを作品に込めるか……。ミュージシャンが思いを巡らせ作品をリリースするように、歩みを進めていきました。そんななか大きな転機が訪れます。そう、2024年の能登の震災です。

「過疎地域であった能登をどうにかして盛り上げたい、という思いは前から持っていましたが、震災が起きて山や林道が壊滅的な被害を受けました。その数は2000以上で、大変お世話になっていた能登ヒバの文化をつくってきたというような会社も廃業に追い込まれたんです」

古谷さんは能登ヒバという材を通し薫陶を受けてきた人の後を継ごうと、震災からの復興にも力を入れるようになります。定期的に能登の森へ通いながら、復興の取り組みを行う彼の思いは、地元の石川県を飛び出し、西に東に協力者を得ます。それが佐藤タイジさん、そして兵庫県尼崎にあるオーダーメイド専門のギター工房Sagoニュー・マテリアル・ギター（NMG）の高山賢さんです。

「古谷さんとは、楽器の展示会で知り合いました。ミュージシャンでもある彼は、音楽で林業を救いたいという思いを伝えてくれました。良い材、つまり良い木がないと良い楽器は生まれません。すぐに意気投合して一緒にやろうということになりました」

ミュージシャンたちが厚い信頼を寄せるSagoNMGと共に、能登ヒバのギターづくりが始動。まずはストレイテナーのギタリストであるホリエアツシさんとのコラボレーションで『ヒバ・ラ・ヴィダ』が誕生します。その後、佐藤タイジさんと、能登の森林に入り、木を伐採するところから立ち会ったギター『エクスカリバーV』が生まれました。

「木材同様ミュージシャンがワクワクすることも、良い音楽にはとても大切です。能登ヒバという新しい材でつくったギターには、新しい感動があり、その先に新しい音楽シーンが生まれていくと思っています」（高山さん）。

能登の復興は現在、さらなる広がりを見せています。実はATENOTEのアテとは、能登ヒバの地元での呼称に由来します。古谷さんはこのアテ＝能登ヒバを生かした創造的復興プラットフォームとしてATE-NETをリリース。伝統の継承から材の新たな可能性を探るリブランディングなどを進めています。

「モノではとどまらず体験を売りにできたらと思っています。ヒバの空間がウェルビーイングの観点からも効果が見込まれることがエビデンスでも出ていますし、ツーリズムやヒバ樽熟成のウイスキーにスモークしたナッツなど、分母をどんどん大きくしていきたい」

能登ヒバ材を発端にし、音楽で広がるプロジェクト。その未来が見据える先は、ずっと遠くずっと大きなところにあるのでした。



タイジさんと高山さんは、古谷さんと一緒に能登の森林に入り、伐採の現場に立ち会った。伐採した能登ヒバは、樹齢が100年を超えるものだったという。『エクスカリバーV』は現在Sago NMGにて受注販売中。



ATENOTE、佐藤タイジ、Sago NMGとのトリプルコラボレーションで生まれた『エクスカリバーV』。材となった能登ヒバの大木の切り株の上に置かれている。

KNOWLEDGE No.4

歌人・岡村靖幸 爆誕！ あの俵 万智と、 短歌本出版

Photograph: Hiroyuki Matsuzaki

Yasuyuki Okamura / Music / Atenote



『短歌ご一緒しませんか』岡村靖幸、俵 万智、2,200円、筑摩書房　岡村靖幸のファンクラブサイトにて掲載されていた短歌教室連載に、修正と書き下ろしを加えた。

短歌といえば、飛鳥時代から面々と続く、日本オリジナルの文化です。俵 万智は80年代に空前のベストセラー『サラダ記念日』を世に放った歌人ですが、その俵先生に同じく80年代から愛を歌ってきた靖幸ちゃんこと岡村靖幸が短歌の手ほどきを!?　本書は異色の取り合わせによる短歌入門です。

俵 万智は短歌の特徴は短いことと、リズムの2つだけ、といったイロハを説きながら、岡村靖幸ワールドな詞を短歌に変換。初心者靖幸ちゃんをナビゲートしていき